

オリエントの塔

オリエントの塔

ポケット文春 106

1962 年 12 月 20 日 初版発行

定価 200 円

著 者 みな かみ 水 上 つとむ 勉 ©

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西 8 ノ 4

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえいたします

オリエントの塔

推理長篇

水上

勉

文藝春秋新社

オリエントの塔 目次

第一章	カルテの婦人
第二章	あにいもうと
第三章	死の疑惑
第四章	大町研究室
第五章	疑惑
第六章	遠い国
第七章	黒い破片
第八章	美しい人
第九章	出国
第十章	白い砂の国

107	95	82	72	58	48	38	28	16	5
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

第十一章	第二の疑惑
第十二章	テベラーイとアイゼの間
第十三章	夜の音
第十四章	オリエントの塔
第十五章	クレールベルの秘密
第十六章	死の家
第十七章	一万五百軒の空間
第十八章	地獄絵図
第十九章	クレールベルの家
第二十章	塔からの手紙

224	206	196	185	178	167	154	142	129	118
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

第一章 カルテの婦人

午すぎから黒い雲が出た。飴いろにとぎされた空からは陽はさしてこなかった。

梅雨があけて、二、三日快晴がつづいていたのに、急な空模様の変り様である。またぞろ、じっとり汗ばむイヤな日がくるのではないかと危ぶまれた。空のひくい七月三日の午後である。

文京区雑司ヶ谷の高台にある橋本大学病院の化粧煉瓦の建物がいやに鼠いろにくすんで見えたのは空のせいばかりではなかった。こんもりしげった常緑樹の森が、この病院を囲んでいた。まわりは屋敷町なのである。うるしをとかしたように青葉がひどくうっとうし

い。そのために、病院前の白砂利をしいた楕円形の広場が、錫いろにくつきりと浮いて見える。

午後三時すぎだった。門の外で停めた黒ぬりの自家用らしい外車から白足袋を鮮やかに翻らせて下り立った二十七、八の和服姿の女がいた。女は石門のわきの小さな守衛室にゆくと、内科はどこですか、ときいてから、表玄関の方へゆつくり歩いてきた。どこか、良家の奥様タイプである。三階建ての病院ははり出た玄関にまで車が横づけできるように廻りこみがつてあるのに、女はわざわざ門の外で車を捨てている。入退院患者や、見舞客の多い日だった。玄関は、かなりな人ごみだった。和服の女が入ってくると、下足番の女が、まず眼をとめ、玄関先にいた人びともしばらく眼をとられた。

「きれいな方ね」

と口にしたときさやく者がいたほど女は長身であった。そして美貌だった。

着物に似合った黒のハンドバッグ。白のレースの手

袋。白の帶止め。アクセサリーはすべて気が利いて
る上に、なによりも、鼻すじのとあった小づくりな顔
だが、きりりとひきしまったきんげん謹厳なかんじがした。

どこかで見たようなひとだ、といったような親近感
あると同時に、冷たい一種の拒絶感をもって、人びと
の眼に映じたのは、服装とマッチした薄化粧の女の顔
が、ひどく彫りがふかくて特徴があったせいであろ
う。

玄関わきの丸窓のある事務室に顔を出すと、女はひ
くいがよく透る声^{こゑ}をだして診察券を求めた。内科の検
診を依頼している。

窓口係で応対した事務員は、横山たつという女性だ
った。彼女は、丸窓に区切られて、ほんの少ししかみ
えない女の顔と胸もとのきっちり^{のぞ}と合わされた襟のあ
たりを覗いて、やはり、美人であることに眼を瞠^{みは}
った。

日野村節子——と、その女は所定の申込書で、そば
に紐にくくりつけてあったエンピツをつかつて、右上

りの細い字で年齢欄に二十八歳と書き込んでいる。横
山たつは、料金をもらって、診察券を手渡し、窓ごし
に、廊下を突き当って、階段を上ってゆかねばならな
い佐々木内科の診察室をいねいに教えた。女は切長
な眼に微笑をただよわせて、その横山たつに向って、
ありがと、と心もち上気した頬をわずかに動かしてみ
せただけであつた。まもなく、チョコレート色のリノ
リュームの敷かれてあるうす暗い廊下を奥へ吸いこま
れていった。

この日野村節子の診察をうけもった医師は、同内科
の助手で、この春インタンがあげたばかりの葛西忠
雄である。葛西忠雄は、当番看護婦の江島みきに案内
され、折から一そうくもった空のみえる窓べりの机の
わきにやってきた女をみると、やはり、この女が、美
貌なことに氣をとられた。

「胃の調子がおかしいのです。三ど三どいただいてい
たのが、このごろ、お夕食しかおいしくいただけませ
んの。ここところがもたれるような感じがして、と

きどき、にぶい痛みをおぼえます」

と、はきはきした口調でそういい、女は薄紹うすちうの生地をとおして、白い襦袢じゆばんのすけてみえる胸のふくらみからやや下方のみぞ落ちのあたりに、魚のようになやかな指をあてている。小さな丸椅子に、この女が坐ると、坐高のたかい上に、むっちりした臀部でんぶと膝の部分 がきわだつてみえる。そんな姿勢に、じっと耐えながら、女は葛西忠雄の蒼白あわしろいしやくれた顔を見上げていた。

「帯を解いてみせて下さい」

葛西はぶつきら棒で事務的な口調でいい、江島みきが手つだつて、女がグレイの名古屋帯を解くあいだ、机の上に眼をやっていた。江島が署名して今しがた提出したカルテの名がとびこんできた。

日野村節子。

印象的な名であった。葛西忠雄は、日本協民党の総裁で、大臣もしたことのある大物政治家の名が、たぶんこの女と同姓であることを思いだした。姓が同一で

あるというだけで、どこか、この女が、政府の要衝ようしゅうにある人物か、それとも名のある実業家の娘のような気がした。あるいは、当人の夫人でもあるような印象を葛西にあたえるのであった。不思議といえた。

やがて、日野村節子は、丸椅子に坐り、紹の着物とすい白布の襦袢じゆばんの襟を一しょにして、ひろげた。私たちのいいやや小さめの乳房が見える。日野村節子は左右からそれをかくすようにしてみぞ落ちをみせた。カルテに記入した年齢よりも、若くみえる肌だった。

乳房の下部から、腹の上にかけて、たいがいその年齢になると、葉の繊維のようなこまかい皺がよっているものだ。しかし、この女は水を張ったようにぴちぴちとした桃色の腹部をしていた。

「ここですか」

聴診器をあて、葛西は慎重に検診してみた。べつにこれといった患部の徴候しうこうはみとめられなかった。

「熱っぽいことはありませんか」

「はあ」

と女は一字に縮めていた口もとを、顔の位置をくずさないでじっとしたままひらいた。

「そんなことはありません」

「不思議ですねえ」

葛西は女の顔をみた。

「どこといって、わるい徴候は見えませんか。ちょっと、そっちのベッドに寝てみて下さい」

江島が固い茶皮製の、申しわけみたいなハンカチほどの白布のまきつけてある枕をととのえ、日野村節子は白い草履を行儀よくそろえてぬいだ。そうして寝台の上に仰向けに寝た。立て膝をさせたり、左右に向きをかえさせたりして、葛西は肝臓や腎臓のあたりを押してみた。女は痛覚をうったえない。強いて何かがあるとするば、みぞ落ちと乳房との右さかい目あたりに、わずかに指先にこたえるくらいの肉の固さが触知されるだけであった。

「ここどころが……どうですか、いたみますか」
かなり強く押してみた。女は、あつとにぶい声をあ

げた。

「痛いです」

といった。

「胃の上方に不審な点が認められるようです。しかし、これぐらいは炭水化物が多いと健康な方でも、固さはのこるものですよ」

そういつてから、葛西忠雄は、

「詳しいことは、レントゲンでみないとわかりませんが、胃なんてものは、神経が作用する点がかなり大きいですからね。気になさらないで、ちょっと様子をみてみたらどうですか」

ときいた。

「はい、ありがとうございます。心配だったものですからね。ガンだとか、潰瘍だとかの前ぶれでもあったら大変だと思ってまいりましたの。先生の仰言ることをきいて安心しましたわ。診ていただいて、もうそれだけで安心です。レントゲンの必要はございませんわね」

たずねるように女は葛西の顔をみていった。

「そうですね。悪化してるようなら、もっと聴診器にだってわかるはずですよ。なに、陽気がこんな変わり目ですからね。うっとうしい天気がつづいてきたもんだから、健康な方でも、このごろは食がすすまないだとか、胃が重いだとか仰言る方が多いようです。ご安心なさい」

日野村節子は切長な彫りのふかい眼を微笑させ、うなずいて立ち上った。葛西は、薬局へ廻す処方箋をしたためたあとで、食のすすむ薬を用意しましょう、と行って次に江島の案内してきた高校生らしい患者に眼をとられた。床の上においてある金網の籠から、帯をとってくびれた細い腹を巻いている日野村節子の方には眼をやらなかった。

しかし、女は、葛西忠雄の顔をじっとみていた。ほんの十秒間であった。その視線は、かなり強く葛西の横顔に向けられていたのだが、当の葛西は高校生の背中に聴診器をあてていたので、気づかなかったのだ。

る。女は十分間ほど、診察室にただけで、すぐ薬局のある廊下の右側に消えた。

「ずいぶん、きれいな方でしたわね」

と江島みきが高校生を送りだしたあとでいった。

「うん」

葛西忠雄は、正直いって、江島みきにあらためていわれて、つい今しがたそこにいた日野村節子の顔を思い出していた。その日は、同僚の助手新田登も室にいなかった。近親者の不幸があつて、午後一時に早退した。医師の杉山も欠勤している。葛西はきりきりまいの診療でつかれていた。時間のすぎるのも忘れていたほどだ。

「なるほど、美人だったな」

江島みきにこたえらるとも、自分にいきかせるともどちらとも思える物言いをして、葛西忠雄は次の患者のくる間にタバコに火をつけて窓の下から、白砂利のみえる広場の方をみた。日野村節子の姿はそこにはなかった。

内科医局につとめていると、美人の胸もとをかきわけける時間があるかと思うと、うす汚い老醜ろうしうの出た女の、しなびた乳房も凝視せねばならない時間だってあるわけだった。医者が特別に患者の名から、その女の肌を記憶に止めることは、門外者のわれわれにとつて不思議なほど数少ないといえたかもしれない。少なくとも、葛西忠雄の場合はそうといえた。

葛西忠雄は、一昨年こぞとせの春、T大医学部を卒業して、この病院にインターンとして勤め、一年のちに国家試験をうけて合格した、それから月一万五千円の国家公務員法なみの給与をうける助手になるためには、約半年間の無給助手の苦惨くさんをなめていた。もっとも、一人前の医者になるためには、そういった下積みしもづみの研究生生活をイヤでも送らねばならぬよう仕組まれているといえ、それまでののはなしだが、二年に近い研究生生活の過去に、葛西は患者の女の中で、情感じもつあんを止めうるような余裕をもたなかったのであった。また、そのように慣習づけられてきたといふかなしみについては本人も自

覚していないといえた。

江島みきは、白い看護衣の腕をまくって、診察時間の交代がきたときにも葛西にいつている。

「先生は、女の方をみても、電柱を見るのと同じでしょう。診察は書いてある看枚の字を読むようなものだっていつか仰言おほいったじゃないの」

日野村節子の美貌であつたことについて、その日無関心な返事をしたことが、その時刻まで江島の反撥はんはつを買ひ、あとをひいていたのかと、葛西忠雄は背のひくい看護婦の横顔をみて考えていたのだ。つまり、そのようにして、日野村節子の面影は葛西忠雄の頭の中から、消えていた。だが、葛西忠雄の頭の中に、ふたたび日野村節子の顔が、灼やきつけられたのは、それから五日もたつてからだつた。まったく、ひよんなことから、葛西は日野村節子と再会している。

七月八日の午後六時ごろ。葛西忠雄は病院から、本郷へ廻り、医学書専門の店で参考書を買って電車通りに出た。彼の住居は病院のある雑司ヶ谷の墓地近くに

あった。農林関係の退職官吏である男が、下宿屋とも、アパートともつかぬ四世帯しか入れない四角いマツチ箱のような貸間専門の離れを自家の庭先に建て、これをかかなり嚴重な素姓調査を行なつて、入居をゆるしている家であつた。葛西は妹の睦子とそこの二階の六畳と三畳のふたまつづきになつた部屋でくらしている。睦子は、今年二十四だつた。去年、N女子大の国文科を出て、有楽町にある毎朝新聞の文化部に就職していたが、葛西はまだ女房をもらうほどの収入はないのだ。妹がいることでずいぶん助かっているような現状だつた。その間借りの部屋へ帰るために、都電に乗ろうとして、本屋の前から、三丁目の方に歩いてくると、昏れなずみかけた車道を、すうーっと黒塗りの車が舗道すれすれに寄つてきて、急停車した。同じ方角に向つて歩いていた葛西は何げなく車の窓をみると、中から手をあげている女がいた。

日野村節子であつた。

葛西は、白い顔と、きっちり合せた襟もとのかんじ

で、すぐ、日野村節子だと気づいたが、女が自分をよんでいることを知ると、ちょっとどきりとした。窓ガラスを下ろして、日野村節子はいった。

「先生、どちらへ」

クラクションをならして、うしろの車がかえている。葛西は、「うちです」といった。

「おうちは？」

「雑司ヶ谷です」

「あら、お近くね、お乗りになつて」

と彼女ははずんだ声でいった。

葛西忠雄は遠慮を表明するヒマがなかった。つかえた車が、早く同乗することを強いるようなかたちになつた。葛西忠雄は四十五六の紺の服を着た運転手のあけてくれる座席に瞬間、すべりこんでいた。

「雑司ヶ谷でしたの」

日野村節子は気やすそうにいつて、

「あたしも、近くです。ちょうどよかつたわ」

そういつてから、彼女は、車が交叉点を大きくゆれ

て渡り終えたところに言葉をついだ。

「おかげさまで、すっかり自信ができて、お食事もいいでしょう。神経とおっしゃったけど、やっぱり、どんかんなあたしなんかの胃腸も神経だったのでしょうか」

「神経障害が多いようです」

と葛西忠雄はかたくなっていた。高価な化粧品品の匂いが鼻をついてくる。それに、日野村節子の体温が、かすかに座席のカバーの下からつたわってきそうな近い距離に坐っている。ゆれるたびに着物の袖と、買ったばかりの部厚い本をかかえるために張っている自分の肘とがふれるのであった。

「雑司ヶ谷って、どこらあたりですか」

「墓地を御存じですか」

「存じております」

と日野村節子はいった。

「その近くの下宿屋におります」

「……」

日野村節子はこっくりうなずいた。そうして、ちょっと語調をいくらか変えて、

「まだおひとりですか」

「もちろんですよ」

と葛西は不機嫌なふうにいった。

「安月給じゃ、女房など、とても、もらえませんか」

「……」

日野村節子はこんな場合、たれでもがいうお世辞をいわなかった。だまって、うなずいている。聡明な感じがするなと葛西忠雄は思った。

「もう国家試験はおとりになったのでしょうか」

「ええ、去年の春」

「だったら、もうじきじゃありませんか」

「……」

何を、もうじきというのか。葛西忠雄はこの女が、自分の結婚について、こんなに関心をもっていることに奇異な感じをいだいた。

「あなたのような人がいると、助かるのですわ、きつ

と……」

と、日野村節子はほつりといった。

「イランの国を御存じですか」

「……」

「そこへ、わたしの知人が遺跡調査に参ります。みんな大学の考古学や、美術の先生たちばかりの集まりだそうですけど、ついてゆく若い元気なお医者さまが欲しいのだそうですよ」

何げなく日野村節子はいうのだった。

「あなたのような方だったら助かるのね、きっと……」

葛西忠雄は、この初対面に近い女が、急に気安くそんなことを口ずさむようにいうのにいつそう奇異なものをもった。しかし、自分に対して、親しみを抱いているということはわかった。葛西はべつだん不快でもなかったのである。

「イランですって」

「ええ、いつか、新聞に出ておりましたのを御存じですか」

「いや」

と葛西忠雄はこたえた。

「イランにはたくさん、先生方の研究材料になる遺跡や美術品が出るんですって……それを、日本から學術研究の目的で、発掘にゆかれますのよ。もう何ども、いつてらっしゃる先生方もおられるとききましたけど……その方たちが、お医者さまがいなくて困ってらっしゃるんですよ」

「……」

葛西忠雄は、よほど、あなたはその調査団の中の誰の奥さんのですか、いや、知り合いなのですか、ときいてみたい気がしたが、そこまで出そうな言葉を止めたのだった。

「関心がございませんのね」

葛西がだまっていると日野村節子はそういった。しかし、その言葉は、決して葛西を詰るようなひびきをこめてなどいなかった。

「関心はないわけではありませんけど、毎日毎日、患

者の蒼い顔ばかりみていますとね、つい、そんな美術や、考古学の発掘のはなしなど、縁遠いお伽の世界のような気がするんですよ」

「お伽の世界」

日野村節子は、くくくくと面白げにわらった。そうして、

「ほんとですわね」

といった。車が雑司ヶ谷に近い、護国寺の暗い森に近づいたところ、

「おうちまでお送りしますわ」

といった。

葛西忠雄は恐縮した。女の家が自分の家に近いとはいってはいる。わざわざ自分の家へ最初に廻ってくれろという。重い本を持っていたから有難くも感じただけ、なぜか素直に甘える気分になれない。

「遠廻りになるようでしたら、墓地の近くで下ろして下さい」

と葛西忠雄はいった。

「いいんですよ。あたしも雑司ヶ谷なの。通り道ですから」

と日野村節子はいった。なるほど、いつかのカルテの住所は文京区雑司ヶ谷町となっていたことを葛西は思いだした。それならば、この辺の墓地を左に入ればそんなに廻り道にならない。葛西は送ってもらうことにした。

護国寺前から都電通りを池袋の方へ迂回した。坂下町から、雑司ヶ谷に向う道の両側は、いくらか高台になった護国寺墓地と、低地になった雑司ヶ谷墓地の端とにはさまれているのだが、葛西の間借りしている家は、左に百メートルほど入らねばならなかった。石屋の角にきたとき、葛西は左折してくれ、と運転手にたのんだ。紺の服を着た運転手はだまってハンドルを切った。退職官吏の家の前に来て葛西は礼をのべて車から下りた。日野村節子は、いった。

「お元気で、さようなら」

ガラス越しに見た女の顔が、暮色の中で白くうきた

ち、かすかに上気したような頬をみせて微笑していた。葛西忠雄は、江島みきが、美しいひとといったことを思いだした。

「なるほど、美人だ」

葛西忠雄は退職官吏山科時三郎の家の門を入り、庭先を通して間借りしている建物の二階に上った。妹の睦子はまだ帰っていないかった。

不意に葛西忠雄は、日野村節子が車の中で何げなくいったイランの遺跡調査団云々の言葉を思いだした。

「あなたのような人だったら助かるんだわ、きっと、そうなんだわ……」

女の言葉のうらには是非葛西にそれをすすめてみたいとする意志のようなものはみえなかったが、言外にイランへ行ってみたいかが、といった遠い意志がかくされているようにも思えた。

「だが、それにしても、なぜ日野村節子は、あんなことをとつぜん車の中でいったのだろう……」

じっさい、外国ゆきは若い医徒の宿望だともいえ

た。同じ医局につとめている杉山は昨年捕鯨船にのって捕鯨オリンピックに参加した。菱田徹も、インターン時代に交渉しておいたのが成功して、国家試験がパスすると一週間目に、水産庁の観測船に乗っている。

菱田の場合は印度洋上に四カ月も、陸をみないで船中ぐらしをつづけてきている。しかし、若い助手たちが、遠出をよろこぶ理由には、一つは収入の問題もからんでいた。外国へゆくとなれば、手当は少なくとも、内地で助手をしているようなものではなかった。それに、見聞もひろめることが出来るし、病院で先輩の顔いろをみながら、きりきりまいをさせられているような多忙さはない。

「イラン……」

葛西忠雄は口の中でつぶやき、妹の睦子の帰ってこない六畳の部屋にごろりと横になると、天井を眺めながら、日野村節子の彫りのふかい白い顔立ちをいつまでも思いうかべた。